

腕の良い大工が 良い材を使い
細部に配慮して建てた

新幹線の窓に岩手山が見えてきた。間もなく盛岡に着く。――厨川くりやがわにオープンした(株)大山建工盛岡展示場の取材に訪れたのは3年前(2017年)だった。南部アカマツの八角形の丸太梁を組んだ力強さと、数寄屋建築の繊細な情趣が融合した「ダイナミックで上質な木の空間」に息を呑んだものだ。先週上棟したばかりのM様邸。足場の『青森県の木で伝統を継承する家 大山の家』の垂れ幕が目を惹く。盛岡展示場を見学して魅了され、展示場しか眼中になくなったというM様。地域の木を使い大工の技で建てる大山建工の家づくりに共感した「思い」を語っていた。



ユーザー訪問>>>

M様邸

DATA

盛岡市みたけ 2021年2月竣工

- 延べ床面積/約50坪(約165.29㎡)
- 使用青森県産材/ヒノキ(土台、大黒柱)、カラマツ(床)、スギ(柱、天井)、アカマツ(床、八角丸太梁)、エンジュ(床柱)。

盛岡に青森県産材の家
年輪が細かな八戸の木

駅からM様邸の現場まで大山慎司社長が案内してくれた。駐車場に乗り入れ、大工たちの車の隣に停めた。大山建工の6人の大工が宿舎に寝泊まりしながら作業を進めている。

駐車場の側から見る屋根が低く、平屋に見えたが、「いえ、2階建てです」と大山社長。駐車場が西側で、向こうの東側へ屋根が緩くせり上がっている。その下に部屋がある一部2階建てとのことだ。盛岡展示場もそのような造りである。

「あそこから丸太梁がよく見えますよ」と大山社長が2階へ足場を上り出した。3本並んで架けられている八角形の丸太梁が『大山の家』のシンボルだ。そ



『木の空間』に誘う玄関ホール。入って左側にLDKが広がる



2月上旬に撮影した竣工間近の外観

れを、吹き抜けのリビングから見上げる造りになっているのも、展示場と同じ。それだけ展示場に「惚れ込んだ」施主の思いが反映されているのだ。



M様と大山建工との出会いは盛岡展示場。ご夫婦とも、数寄屋建築と八角丸太梁を組み合わせた繊細ながらも野趣ある木の建築の美しさに魅了された。展示場と同様に、青森の木と“大山の大工祭”の技で建てられたM様邸の“ダイナミックで上質な木の空間”が住む人を、来客をもてなす(LDKは30.6帖)

現場から歩いて1分の近場に自営業を営むM様の事務所があった。テーブルにご夫婦と向き合う。展示場を見学した話から始まって、すぐに気付いたことがある——ご主人は、木を知っている人だと。こう話したのだ。

「床板の張り方が良かったね。ただ板を並べて張るといっているのでなしに、1枚1枚吟味して張っている」と。展示場のアカマツの床板のことだ。ふつうは、吹き抜けの天井に現わしになった丸太梁にまず惹かれて“上”ばかりを見上げるところだが、ご主人の目は“下”の足元に向けられていたのだ。そのアカマツの張り方が、木目や色合いを吟味して張っている、と評価するのである。木の見方を知らなければそのような細部に目が留まることはない。

「プリントしたもので同じ木目になるけど、自然の木だから1枚として同じ目はない。張る前に、並べて吟味しているんだ

ね、同じような木目、色合いを選ぶために。張り終えた床面が一体の仕上がりになるようにね。床だけじゃなく、天井の羽目板の張り方もそう」とご主人。「腕の良い大工が、良い材を使い、細部に配慮して建てた家だよ」と称賛した。

——まるで建築関係のお仕事みたいなのに詳しいのほなぜ？

ご主人の話 これですよ(とテーブルに置いたのは、小物入れであった。表面が磨き込まれた石みたいにピカピカである。石ではなく、木なのだった)。トチの木の幹にできるコブでね、それをヤスリで磨くんですよ。コブは、もともとはこんな形をしているんです(と、今度はそばの棚に置いてあったものを見せてくれた)。こういう握りこぶし大のコブが、トチの木の肌にくつついているんですよ。大きさはいろいろあるんだけど、細工に使うのはこぶし大だね。——そのコブを磨くのですか。

ご主人の話 そう。ヤスリで磨く。手作業でね。すると、デコボコの表面がだんだんと平らになつて、模様が浮き出てくるんです。なんとも言えないいい模様。自然の木の味だね。作れるもんじゃない。

——それを小物入れにしているのですね。

ご主人の話 私は釣りをやるからエサ箱にしているけど、プレゼントした中には子供のへその緒を記念に仕舞っている人もいますよ。

——コブと出会ったきっかけは？

ご主人の話 きっかけとか……私、これ、やるからね(と、鉄砲を打つしぐさをした)。山に入れば、狙いはクマとかシカだけど、周りは木だけだから、自然と木に親しむようになるんだね。これ(鉄砲)をやる人には林業の人が多いです。彼らは木のことなら何でも知っている。そういう仲間がいると、こつちも木に興味を抱くように



なる。真っ直ぐに伸びているものばかりが木じゃなく、コブも

木の一部で、すらりとしたものよりも味わいがある。磨いてみ

ご主人がトチの木のコブを磨いて作ったという小物入れ。光沢がまるで石のようにピカピカ



リビングの階段越しに坪庭を望む

た。そうしたらもつと味わいが
出た。それが、この小物入れで
すよ。

木は、同じ樹種でも同じ木は
ない。1本1本全部違う。コブ

もそう。一つ一つみな違う。スギ
だつてアカマツだつて育つ地域
によって微妙に違う。そういう
“違い”が自然の味わいなんだ
ね。

木の目を合わせて使う 1枚1枚色合いも吟味

——八戸と盛岡のすぎでも違
いますか。

ご主人の話 違うね。八戸と
盛岡はいわば“お隣り”で、車で
1時間半ばかりだから気候も
たいした変化はないと思われ
がちだけど、実は微妙に違うん
です。八戸のほうが盛岡より北
にあるぶんだけ秋が早い、雪の
降り始めも早い、雪が多い、春
が遅い——そういう微妙な違い

が、人の目にははっきりと映ら
ないけども、木はちゃんと記憶
しているんですよ。年輪に刻ま
れている。製材して板にしてみ
れば木目の違いとなつて表れ
る。細かさが違うんですよ。

木の目は繊維のようなもの
だから、繊維の間隔が細かいと
いうことは“強い”ということ。
木目も美しいしね。その美しさ
をいかに吟味して使うかだね。

木をたくさん使えばいいと
いうものじゃない。「良い木」を

使った家が「良い木の家」になる
んです。「良い木」を使うために
は、良い木を選ぶ“見る目”がな
ければ見分けられない。集成材
に単板を張ったような柱は上
下がなくて、どつちを上にして
立ててもいいわけだけど、それ
じゃ職人の目は育たないよね。
展示場を見たときに、「良い木
を使っているな」とまず思った
ね。「木を知っている大工が建て
たな」とね。だから室内に上品
さが備わるんだね。

地域の木を使うこだわり 大工を育て技を継承する

奥様の話 わたしは家の造り
のことも、木のことでもまったく
知りませんでした。家に使われ
ている木のこと、いちばん最
初に知ったのは“ハリ”なんで
す。横にかけている木を、ハリと
いうのだとは主人から聞いて
知ったんですよ。もう昔のこと
ですけどね、主人がわたしを嫁
にもらいに実家に来たときに、
「すごいハリですね」と天井を

見上げたんです。それが「梁」なのだ。そのときに初めて知りました。実家は今は建て替えられましたけど、昔ながらの床も壁も木の家で育ちましたから、無意識のうちに、建てるなら木の家という思いがあったんでしょ。うね。地元(盛岡)にも県産の木を使って建てる工務店があって、7、8軒くらい見学していました。いよいよ自分の家を建てることになったら、お願いしようと思心決めていたんです。それが、去年(2019年)、大山建工の展示場を見てしまったら、もうそれしか見えなくなりました。

ご主人の話 最初はね、車で通りかかったときに、クレーンで丸太が吊り上げられているのが見えたんです。3年前だね。工事が始まる前から『大山の家』の看板が目立っていて、大山建工という会社の住宅展示場が建つのだということは知っていたけど、クレーンで吊るほどの長尺で、しかも八角形の梁な

んて見たことがなかったから、どんな家が建つんだろうなって……。家を建てる予定だったのに、気になったというよりも、期待があったね。楽しみでしたよ。これまで家に家を建てようと思つたのは2回あるんです。家内がね、「嫁という字は女に家と書くのに自分には家がない」と冗談半分に、いやいや本音ですよね、そう言うもんだから、実現させなきゃ男がすたると思つていたんだけど、どうもうまくいかなくてね。最初に建てようとしたときに父親が、その次には母親が……、というわけで、今になってしまったんです。でも、考えてみれば、「盛岡展示場が建つからそれまで待て」ということだったんでしょね。

奥様の話 オープンした展示場を見てきた主人が、一緒に見に行こうって誘ってくれたんですけど、その頃はなんやかや忙しくてね、やっと見学に行ったのが去年だったんです。ひと目で、「出会った」という感じでした。ね。運命の出会い！ そういうときって、言葉が出ないものですね。玄関に入って、正面に地窓のあるホールをちよつと歩いていって、天井まである大きな格子戸を開けた瞬間、ぱあ〜と視界が開けた、あのときの解放感。吹き抜けの広々とした空間といい、木の匂いといい、太い柱に、床も天井も木で、全身が「木」に包み込まれた感じでした。正面の吹き抜けのリビングと、その手前に続く和室と、ガラス越しの中庭とが、いっぺんに見えたんですよ。見たことありませんでした、あんな開放された室内の造りは初めて。これまで見てきた工務店の家が全部消去されて、展示場しか目に残っていませんでした。

ご主人の話 細部を見ればその家がどんな造りかは分かるんですけどね。さっき話したアカマツの床板もそうだけどね、それは床板一枚にしても大工任せじゃなく、会社のこだわりでそういうふうに使うことを徹





リビングの奥に続く和室。数寄屋の風情が漂うエンジュの床柱

底している、ということなんだね。方針だ。良い物を作るにはまず原料が良くななくちゃならない。大山さんでは、その家に合った木を棟梁が山に行つて選ぶことから始める、と社長さんから聞いたときに、やつぱり、と納得しましたね。そういう教育を受けた大工が現場にきて作っているから、会社としてのこだわりが現場に反映されるんだね。

“元請け”で全国に展開 社員大工が泊まりがけで

—— 遠方の現場にも木材を運び、大工も出向いていって建てる、ことに徹しているのは地方の工務店では珍しい。

ご主人の話 そうそう。それが大手と下請けとなると、そうはいかない。仕事を取る元請け

(下写真右から)①M様邸の現場に掲げられた「大山の家」の垂れ幕②上棟式に向けて準備が進む④大山の家—シンボルのアカマツの八角丸太梁⑤木材がいかに多く使われているかが一見して分かる





リビングとひと続きのキッチン。床のアカマツ、腰壁・天井のスギと、アイランドキッチンとの飾らぬ配色が洗練された空間を創り出している

は大手で、現場を作るのは下請けだから、その繋がりには“金”だ。下請けは与えられた予算の範囲内でしか造らない。だから、お客と担当者との打ち合わせが現場に伝わらない。予算で捻じ曲げられるから。

実はうちの父親がけっこうアパートを建てていましてね、そのときに私もそういう元請けと下請けとの実態に触れることができたんです。大手の名前はテレビのコマーシャルで知られているけど、下請けは地元の小さな工務店や一人親方の大工たちだ。その点、大山建工が元請けで、その社員の大工がわが家を造っているのだから、施工にとつてこれ以上の安心感はない。直営の強みだね。

奥様の話 契約前にも、契約後にも五戸にある加工場でわが家を使う木材を見せていただきました。営業担当の方が車で案内してくれたんです。わたしたちだけじゃなく、聞けば遠方の九州の博多の料亭を建て

た女将さんも木材を下見に五戸まで来たんだそうですね。こういう木を使います、という木材との“対面”の場を設けているのですね。主人が言うには、普通の工務店を使う木材を材木店に注文して、そこから現場に運ばれてくるのに対し、大山建工では自分のところで製材して加工している、ということでしたけど、加工場に行つてそれを実感しましたね。木材が一杯、見上げるほど積んでありました。自然乾燥させているんだそうですね。

木も沢山ありましたけど、大工さんの多かつたのにも驚きました。大工さんも社員なんだそうですね。見るからに初々しい新人の大工さんいましたけど、そのうちの一人が、わが家の現場で働いているんだそうですね。修行ですね。大工さんつて、現場で怒るけれど、それにはちゃんと理由があつて、怒られる新人のほうも、木材を踏んだから怒られたんだと分かつて、



坪庭を挟んで和室と向き合う洋室。床はカラマツ

木材を大事にすることを知って
いく。そうやって若手を育てな
がら、技術も継承していくん
です。

ご主人の話 “木を見れる”大
工が、木の持つクセを生かして
使ったこそ「木の家」なんだ。で
も、実際にあるんですよ、節だ
らけの板を床にも壁にもこれ
見よがしに張っている工務店
が。そりゃ中には節が好きだ
というお客もいるだろうけど、程
度というものがあつたよね。セン
スの問題だね。センスは磨かな
きゃ光らない。
——年明けの2月にM様のご

協力で見学会が開催されると
のことですが、通りがかりに
建築中のM様邸を目にして、
ひそかに完成を心待ちにして
いる人もいるのではないで
しょうか。

ご主人の家（笑顔で頷きな
がら）大山建工が「全国区」の
会社だとは、契約後に知ったん
ですよ。盛岡はまだ近いほう
で、仙台にも千葉にも東京に
も、福岡にも建てている。北海
道にもね。「全国区」じゃないで
すか。そういう工務店に頼んだ
んだ、という実感がわいてきて
ね。気分いいですよ。

真心こめて住みまわす

株式会社 大山建工

本社 ●三戸郡五戸町大字切谷内字淋代14-1
TEL.0178-68-3353 FAX.0178-68-2454

本部 ●八戸市大字河原木字千刈田7-1
TEL.0178-21-3055 FAX.0178-21-3033
<http://ooyamano-ie.jp/>

内舟渡常設展示場 ●八戸市長苗代字内舟渡84-13 産業道路沿い
TEL.0178-21-3055

盛岡営業所・展示場 ●盛岡市厨川1丁目21-30
TEL.019-601-7311 FAX.019-601-7134



木という生きものを扱うからこそ
人の気持ちが入り込む余地がある



勉強会

地域の木材の魅力と職人の技術

〈主催〉

NPO法人

あもりの木で地域を支える伝統と技術の会

「地域の木材の魅力と職人の技術」をテーマに、NPO法人あもりの木で地域を支える伝統と技術の会（大山重則理事長）が（株）大山建工本社（五戸町）で勉強会を開いた（2020年11月）。前年の「茶室構造見学会」に続き、建築を学ぶ学生を対象に「本物の建築」に触れてもらおうと開いたもので、岩手県立二戸高等技術専門校や八戸工業大学生たちが参加した。講師は、数寄屋建築で知られる建築家の前田伸治氏（前田伸治+暮らし十職一級建築士事務所代表表）。〈一部〉が「講話」、〈二部〉が「茶室」、〈三部〉が「数寄屋建築の見学」と三部構成で行われた。

興味持ち参加して
将来のきっかけづくり

「若い頃に、何でもいいから一つの『きっかけ』をつくっておくことが大事です。興味があったら何でも参加してみること。それが必ずあとで自分のためになります」

冒頭、前田伸治氏は学生た

ちにそう呼びかけた。

「歳を取ったときに、何かをやってみようと思っても、若いうちにその取っ掛かりをつくっておかないと、なかなかその先には進めないものです。だから、ちよつと興味があるなど思ったらまず参加してみる。その体験が、あとで自分のためになるときができます。今日の勉強会が、そんな一つの『きっかけ』になってくれればいいです」

チップの材料にしかならなかった曲がった赤松を、その曲



前田伸治氏の講話に熱心に聞き入る参加者たち



見る者を圧倒する木の強さと美しさはこれから建築の道をめざす若者の心に深く刻まれるはず

がりを生かして建築用材の丸太梁に再生させたのが前田伸治氏だ。大山建工の『大山の家』のシンボルである八角丸太梁がそれ。数寄屋建築の繊細な情趣と、丸太梁の野趣とが融合する空間。県外の遠方の建築現場へも自社の木材加工センターから青森県産材を搬送し、「大山の大工衆」が向いて、泊りがけで建てる——というこだわりに徹したスタイルで全国各地

学生たちは初めて目にする本物の「茶室」(仮組)に見入る



に展開している。

『大山の家』づくりは、前田氏が描いた設計図に沿って、使う木を山で選ぶところから始まる。木の立ち姿を見、伐り出し、製材し、墨を付け、木作りをする。木にはそれぞれ個性がある。堅いとか柔らかいとか、その個性を見分け、適材適所に生かして使うのが大工。大工の目と技が伝統建築を継承してきたのだ。

「木」の自然味を生かす木造建築の素晴らしさを語る前田氏だが、自身の学生時代は、近代建築が真つ盛りだったという。振り返ってこう話す。

前田氏の講話 学校で木造建築は習いましたが、あの当時は、近代建築が全盛で、大きな木を使って建物を建てる、などとは建築界では誰も見向きもしていませんでした。そういう時代でした。学校を出て、勤めた設計事務所での仕事も、RCとか鉄骨とかばかりで、木造建築はありませんでした。そもそも木造建築が設計の対象になると

いうことがなかったのです。

ガラスと鉄とコンクリート。これが近代建築の三大要素です。当時は近代建築礼賛の風潮に支配されていて、「新幹線の駅」と同じような建築ばかりが建てられていました。日本中どこへ行っても新幹線の駅は同じで、その地域で採れたものを使うというのではない。つまりは個性がない。そんな地域性や個性がまったくない駅みたいな建築ばかりがもてはやされていたのです。

果たしてそれでいいんだろうか、と考え出していました。日本建築は、木の個性を生かして建物を建てる。それなのに、木を、鉄やコンクリートの工業製品と同じような使い方をするのはどうか。確かに、木を使えば木材の消費の点ではいいことなのだろうけど、「生かして使っている」とは言えない。それでいいのか。

そもそも木というのは、まず私たちよりもはるかに長い時

間を生きてきている。私たちよりも長い時間かかって育った木

を、建築に「使わせていただく」という敬いの心がまずあるべきです。私たちの祖先は、そうした感謝の念を持って木に接していました。一本一本の木を、その木に「尊厳を与える」というような使い方をしていました。一本一本異なるそれぞれの個性にとつて、組み合わせ、また木を余すことなく使うことで、自然のものを大事にしよう、という姿勢で建築を作ってきた。その背景には、日本人特有の自然を慈しむ精神があります。

言ってみれば、木というものは極めて個人的なものです。これを使って作る大工の腕も個人的なもの。だから、木造建築というものは個性のかたまりなのです。対して近代建築は、工場で作った工業製品を使うことによつて、意図的に木の持つ個性を消したのです。

でも、この隠された個性の中にこそ、「表現の自由さ」が出て





柱の数を抑え、大きな開口から庭を望む美観を支えているのは「桔木」。伝統工法の一つで、桔木を差し入れて下屋を撥ね上げ、柱への荷重を軽減させている（松戸市・W様邸）

くるのです。建築の道を歩もう
 としている皆さんには、過去の
 建築を振り返るばかりでなく、
 “木の個性”を生かした個性的
 な表現を目指してほしい。自分
 のものとしての建築の“表現の
 可能性”を探ってもらいたいも
 のです。

使う木を地域で賄える 樹種が豊富な青森の山

さて、大山建工と一緒に仕事
 をするようになって20年ほどに
 なります。この地域に生えてい
 る木を使って、この地域の建築
 を作る、というスタイルを大山
 建工は貫いています。もともと
 と日本における家づくりとは、
 それが本来の姿だったのです。
 どこの地域にも山があり、わか
 わざ隣の県から運んでこなく
 ても自分の地域の山に木があっ

（下写真右から）①S様邸（五戸町、2015年竣
 工）②W様邸（松戸市、2014年竣工）③料亭嵯峨
 野福岡市、2012年竣工、前田伸治氏撮影）④S
 様邸（東京都、2010年竣工）⑤タテ石材
 （2009年竣工）





惹き込まれるような美しい玄関の料亭「嵯峨野」も、青森県産材と大山の大工衆の技で建てられた

らを組み合わせ、一軒の家を建てられるほどに樹種が豊富なのです。梁には曲がりの強い赤松を使う。これは地震への対策でもある。地震にどうやって耐えるか。その対策として、それぞれの木材が持っている個性を組み合わせ、強い建築を作ってきたのです。

在来工法という言葉が生まれたのは戦後のことです。日本はずうっと在来工法でやってきたかのように思われていますが、それは違います。戦後、材料がなくなってきた、昔の建築のとおりににはできないが、昔のようにするために、筋交いを入れたり金物を使ったりして、建築に強度を持たせた。それ以前の、戦前の建物はとても大きな材料を使っている。そうでなかったら戦前の木造建築が今まで持つわけがない。地震に耐えられるわけがありません。

青森の一番の魅力は、大径木が手に入るといふこと。この地域の何よりの財産です。太いこ

の一本からいろんな材料を取ることが出来る。柱も梁も桁も長押も、全部の造作材を取ることが出来る。それは、一本の大きな木が持っているからできることなのです。材木店から木材を取り寄せるしかないよその地域では、こんな一本の大きな木を使って家を建てるなんていうことは出来ない。できないのです。青森は素晴らしいと再認識する次第です。

(ここから前田氏はスクリーンに映した自身の設計による建築写真を紹介しながら説明していく)

前田氏の講話 これは5年前に千葉に建てたお宅です。最初に庭の整備から取り掛かったほどに庭が広く、建物はそのあとで庭と一体となるように建てました。庭が眺められるように窓を大きな開口にするためには、柱の数を抑えなければなりません。柱が一杯立ってしまふと庭の景色が見えなくなりますが、極力少なくしなければなら

いが、少ない柱で屋根を持たさなきゃならない。そこで下屋に荷重がかからないようにするために、下屋の間に差し入れたのが、「拮木」です。その拮木で下屋を撥ね上げることで、柱への荷重を軽減させ、大きな開口部を設けることができるのです。この拮木も伝統工法の一つですが、大工なら誰でもできるというものではありません。「木」というものを熟知している大工でなければできないことです。木を知らなければ絶対にできません。

図面に合わせ木を作る いかに美しく見せるか

選んだ木を、建てる建築に則って、作っていく——これを“木作り”と言います。一本の木から、こう取れば、木目が綺麗に見えるとか、いろんなことを考えながら木作りをする。曲がった木からは、曲がった梁を取る。その梁が、交差する梁を受ける。曲がりがないと、そ

たのです。どの山も森林資源に恵まれていた。だからどの地域にも木造建築があった。山と共に私たちの暮らしはあったのです。

山から木を伐り出して建てる大山建工の家づくりは、今の時代は、他県からすると驚きなのです。杉や赤松、栗、ケヤキ、ヒバ、ナラ、タモなどなど、それらの木を近場の山から伐ってきて使える、ということがまず驚き。他県にはありません。それ



大山の家づくりは山で木を調達することから始まる。梁に見合った赤松を、柱の杉を選び、伐り出し、乾燥させ、加工し、大工が建てる。地元の山と現場を結び付ける、現在では稀な家づくりを展開している

に支えの束を立てなければならぬが、束が見えれば空間の美しさが損なわれる。それで曲がりが必要なのです。そんなふうに、図面に合わせて使う木を一本一本作っていくわけです。

これは東京の深川に建てた「慧然寺」の庫裏（2018年竣工）ですが、正面の「破風板」

を見てください。緩いアールを描いているのが分かるでしょうか。これは一枚の板からそのような曲線に合わせて切ったのではなく、その曲がりに合う赤松を山から見付けてきたのです。木を挽いたら、図面のアールの線とぴつたり重なりました。見付けた大工の目が素晴らしい。

一本の木をどういうふうに挽いて、どうやって使ったら美しく見せられるか——そこで重要なのが「木目」です。板目や柃目や、板目を挟んで両側が柃目になっている中柃などがありますが、ちなみにこの木目を見るのは日本人だけなのです。外国で木の入札を行う場合に、外国の職人は材質の種類にはこだわりますが、木目には関心を示しません。それは、日本人である私たちの祖先が、木を慈しんできたからです。自然に対して

慈しむ心を持って木に接してきました。そういう長い歴史があるのですね。黒松は堅くて男性的。赤松は女性的な柔らかさがある。木には、木目ばかりでなく、材質の違いを生かして、自由に使い、空間を表現できる魅力があるのです。

ところが、ハウスメーカーの家となると、仕様が決まってしまうています。あれこれ制約が多くて、自分の好きなように作れない。窓がほしいけど、できない。ここをこういうふうにしたのだけど、それもできない。自分の家を建てるのに、自由がきかない。工業製品で作るからそうなるのです。

自由な使い方ができるのが、生きた木なのです。そこが工業製品とはまったく違う生きた木の最大の魅力です。木の建築は、工業製品ではありません。無垢材を使うことで木の持つ肌合いや本物の手応えが心に染みてくる。無垢材の木肌はちよつと拭いてあげるだけで艶

が増してきます。家族とともに家も成長します。木の家は生きているのです。木という生き物を扱うからこそ、人の気持ちが入り込む余地があります。

私の尊敬する建築家の言葉に「切ったら汗が出るような家を作れ」があります。木を、建築を、生き物として接しているのです。その神髄から生まれた言葉です。忘れるな、という戒めの言葉でもあります。

どうぞ皆さん、自分の気持ちを込めた木の建築を建ててください。木を使って自分なりの表現の可能性を切り拓いてください。

*

講話に続き（二部）では、大山建工が北海道の新千歳空港国際線ターミナルビル併設の高級ホテル内に建築した（2020年3月竣工）「茶室」について、大山聡建築部長が竣工までを工程順に説明した。

この茶室は、日本の伝統文化を外国人などに伝える主要施

設として、同ホテルの4階ホールに設置された。小間、水屋、広間、大広間、立礼りゅうらいからなり、建物の面積は合わせて約185㎡。建築材は、京都・北山産の磨き丸太以外ほとんどが青森県産の杉、赤松、栗を使用。20〜30歳代の若手10人を含む「大山の木工衆」20人が、現地に泊りがけで建てた。

ホテル内のため、庭は土の代わりに石を敷き詰めた石庭。その上に建つ、茅葺の屋根と円い吉野窓から風情が漂い出している。茶室の向きが斜めに配置されているのは、そばに建つ広間や大広間や立礼のどの角度からもよく見えるようにしたから。これも数寄屋の「おもてなし」である。

*

和室から窓越しに庭園 来客をもてなす 数寄屋

〈三部〉では、本社のそばに建つS様邸を見学した。設計は前田伸治氏、施工は大山建工。2

015年に竣工した。平屋建てで91坪。お客様を招き入れる『表門』から入る。

門の扉を指さして中里正義棟梁が、「これが、さっきの前田先生の話に出てきた中杵です。真ん中が板目で、両側が柱目。一枚物の杉板なんです。こんな太い杉（と両手を広げて）からでない」と取れませぬ」

表門の内側は、ピンコロと呼ばれる小さな四角い御影石を敷き詰めた駐車スペース。その脇に、奥に庭園が見えるもう一つの門がある。これが『中門』く

ぐつたお客様（学生）を、この家の亭主に代って大山慎司社長が玄関へ案内する。

「中門から玄関までを『ろじ』と呼びます。漢字で『露地』と書きます。単なる通路じゃなく、心をきれいに洗ってから入るといふ、精神的に準備する場になつています」

説明されなければ素通りしてしまう箇所の一つが『敷台』だ。ケヤキの一枚物で、長さが2間（約3・64m）。本来なら真ん中に束を立てないと弱いのだが、ここにも数寄屋ならではの

の隠れた工夫が施されている。大山重則会長が、「正面の板の手前のほうは、人が乗るとたわみそうに薄く見えますが、奥のほうが3cm厚くなつているので、それで荷重に耐えるように細工してあるのです。細工を表に見せず、裏で支える、というところも数寄屋の心です」

敷台から、畳敷きの『取次』に上がり、畳一畳分の通路の『入側』^{がわ}通つて、和室に入る。床の間の脇の壁際に並んで座つた学生たちに、「おお」という感嘆の表情が浮かんだ。障子が開け放たれた大きな開口の窓越しに広がる日本庭園。室内に居ながら外の自然と繋がる庭の趣きに見入る。

「亭主の座るところが、炉の切つてある場所です」と大山会長。「そこでお茶を淹れます。もてなすのはお茶だけではありません。皆さんが今、見ている庭の景色もです。そういう良い位置に和室を設けるわけです」

和室の繊細な情趣から一転



新千歳空港国際線ターミナルビル併設のホテル内に作られた「茶室」。青森県産の杉、赤松、栗が使われている



数寄屋建築と日本庭園が一体となった庭屋一如の風情が来客を心からもてなす

するような、吹抜けのダイナミックなリビング。36帖もの広い空間を大黒柱1本で支えているのが、赤松の丸太梁を交互に組んだ伝統工法の力だ。「これを木組みと言います」と大山聡建築部長が天井を指さす。

1本の梁の長さは11m。途中で継いだものではなく一本物で、これを5本使っている。太くて長尺の梁を組むことによって、建物に強度を持たせているのだ。

学生たちが濡れ縁から庭に

下りる。

黒坂秀紀設計部長代理が、「少しアールになっっているのが分かりますか」と指さしたのは『破風』だ。見れば、直線ではなく、緩やかな曲線を描いている。「前田先生はこの『むくり』の線を、フリーハンドで一発で描くんですよ」

飾らぬ、さりげない曲線が、屋根に「柔らかさ」を与えているのだ。

「木を敬い、巧みな技」の見出しで勉強会を報じた東奥日報の記事(11月10日付)で、八戸工業大学3年生は、「講話の中で、木の建築は工業製品ではない、という言葉が印象に残った」、また二戸高等技術専門学校1年生は、「三八地域に多くの樹種があることが分かった。木に対する考え方が変わった」と感想を述べている。

前田氏の言葉のとおり、勉強会に参加したことが、「必ずあとで自分のためになる」日にくるに違いない。

株式会社 大山建工

本社 ●三戸郡五戸町大字切谷内字淋代14-1
TEL.0178-68-3353 FAX.0178-68-2454

本拠地 ●八戸市大字河原木字千刈田7-1
TEL.0178-21-3055 FAX.0178-21-3033
<http://ooyamano-ie.jp/>

内舟渡常設展示場 ●八戸市長苗代字内舟渡84-13 産業道路沿い
TEL.0178-21-3055

盛岡営業所・展示場 ●盛岡市厨川1丁目21-30
TEL.019-601-7311 FAX.019-601-7134

